

## 「みんな同じ命だから」エピソード③ ルイは十五歳、頑張ってます！

犬や猫のペットを家族の一員として、最後まで大切に面倒をみてあげてほしい、そんな願いをこめて、庄原市西本町の犬や猫のペットを家族の一員として、最後まで大切に面倒をみてあげてほしい、そんな願いをこめて、庄原市西本町の大谷京子さんは「みんな



上尾夫妻と愛犬のルイ

ルイの生まれは難産だった。母犬は、庄原市西本町の上尾達也さん、玲子さん夫妻の愛犬、ラブラドルレッドリバーのラブ。初産だった。自宅で出産準備を整えたが、なかなか生まれてこない。そのうち、ラブが苦しむようになって、心配になって動物病院に連絡、入院した。

出産促進剤を注射しても出てこない。このままでは母子ともに危険と判断したドクターは、帝王切開に踏み切った。おなかには七匹の子犬がいた。最初に生まれてくるはずの子犬が死んでいて、産道をふさいでいる状態だった。残りの六匹も仮死状態、ドクターが取り上げた子犬を玲子さんがさすったりたたいたりして蘇生させた。

血統の人気犬種ということで、兄弟姉妹たちは次々ともらわれて行ったが、ルイだけが最後まで残った。ルイがとりわけ元気でオテンバだったからだろうと、達也さんは当時を回想する。おとなしくて手間のかからない子犬が好まれるようだ。

ルイは結局、母親のラブと一緒に上尾家で飼われることになるのだが、散歩の時が大

変だった。大型犬のラブラドルが二頭、ルイはとりわけヤンチャで元気いっぱい、引きずられるようにして散歩していたという。

病気知らずだったルイに異変が起きたのは十一歳のとき。乳腺に腫瘍ができたのだ。犬の乳腺腫瘍は、皮膚腫瘍に続いて多い腫瘍だという。手術で取り除いたが、今度は十二歳のときに目の下に脂肪の塊ができて、これも手術で切除。

一般にラブラドル犬の平均寿命は十二歳だと言われている。人間の年齢に換算すると八十台、高齢もあってルイの体を次々と病魔が襲う。十四歳のときにはまっすぐ歩けなくなり、同じ場所をクルクル。三半規管炎症という病気で、薬で症状は治まったが、この頃からルイは目に見えて衰弱した。

腹部の腫瘍が大きくなっていて、心臓や肺、胃を圧迫しているが、手術は困難な状況だという。右目の下の脂肪の塊は、切除しても何度も再発。骨に根がある状態で、コブが大きくになると皮膚が引っ張られて痛みが出る。今年に入ってから一月と三月、最近では八月四日に切除手術を受けた。ル

イは現在、十五歳と八カ月、人間の年齢では百歳近くになる。

満身創痍のルイは、度重なる入院や手術に耐えて、上尾さん夫妻の待つ家に戻って来る。今は仕事を退職した達也さんも、ルイと一緒に遊んだり、ブラッシングするのを楽しんでみている。ルイが喜んでる姿を見ているだけで、心が癒される。

「自分たちの年齢を考えると、ルイが最後の犬かもしれない」

達也さんは現在六十五歳。成犬ならば別だが、子犬から飼うとなると最後まで面倒を看切れる自信はない。

「ルイの忍耐力や生命力には感心させられます。わたしたちもまだまだ頑張らねばという気にさせられます。だから、ルイには長生きしてほしいんです。もっと一緒にいたいんです」

ルイの生命力の源泉は、間違いなく上尾夫妻の愛情である。

インターネットのペットの総合情報サイトで、犬を捨てる理由を掲載していた。「大きくなって可愛くなくなったから」、「思ったより世話やし

つげが面倒だから」、「飽きてしまい、別の犬が飼いたくなくなったから」、身勝手な理由が並んでいるが、「犬が病気になる、通院や介護にお金がかかるから」という理由には、考えさせられてしまった。

保険の効かないペットの治療には確にお金がかかる。捨てるのは論外だが、自分だったら上尾さんのように手厚くルイの面倒を見てあげられるだろうか……。

あらためて、肝に銘じたことがある。ペットは縫いぐるみや機械ではないということだ。病気や怪我をすることもあるし、人間よりも早く歳を取る。飼い主である以上、そうしたときの心構えをしておく責任がある。

私事だが、わが家ではドラマという白猫を二年ほど前から飼っている。野良猫だったので年齢はわからないが、推定で六歳ぐらい。人間ではちょうど中年の入り口あたり。最近、少し太り気味で、餌の分量を減らした。異変はないかと、気をつけて体を調べるようになった。「いつまでも元気でいてくれよ」

尻尾の付け根を掻いてやりながら、耳元で囁いている。

## 新・図書館員ノート「思い出の一冊」⑥

### 「うちの友」赤毛のアン

この本と出会ったのはたぶん小学生の頃だと思います。

マシユウとマリラ兄妹の暮らすグリーンゲイブルスに、働き手の男の子と間違われてもらわれて来た孤児アンの物語です。ある日男の子を駅に迎えに行ったはずのマシユウは、ひたすら待っていた赤毛でそばかすだらけの女の子に、間違いだとは言えず、馬車に乗せて帰ります。

「まあ、なんということだろう！」

家についてのアンの姿を見たマリラはすぐに孤児院に返すつもりでしたが、愛情に飢えたアンの身の上を聞く内

に、家に住ませようと覚悟を決めます。ここから、生まれつき豊かな想像力を持ったアンは、マシユウとマリラにとって、生涯かけがえのない娘になって行くのです。

子どもの頃の私は、マシユウのように寡黙で朝から晩まで働く父とは、遊んだり話しをしたりという記憶がありません。そんな父が、本好きの私のために仕事帰りに買って帰ってくれた本がとても楽しみでした。黄色い表紙の真ん中にアンのイラストがあるハードカバーの本。

当時の私はこの本を書き写すほど大好きでした。大切に取っていたのに、どういふ訳か今は手元がないのがとても残念です。しかし、父とのなつかしい思い出として、いつまでも心に残っている大切な一冊です。

(三次市立図書館員によるリレーエッセイ、執筆者の似顔絵は有光館長作)



# 柳田国男『明治大正史世相篇』

## —— 記憶による「歴史」の再現

数字や年表に頼らず、慣習や記憶といった庶民が実感できるものを指し、「歴史」の論述を試みたのが、柳田国男『明治大正史世相篇』です。昭和6（1931）年の事です。

「世相」とは世間の有様。私たちの日々の暮らしと隣り合わせていて、喜怒哀楽と響き合っています。これに対して、国事や政策、外交を基軸とした「歴史」は、雲の上の出来事のように思えるものです。柳田が描こうとした「世相」は、目次を見れば、成る程と思わせるものです。「第二章 食物の個人自由」「第三章 家と住心地」「第八章 恋愛技術の消長」「第十四章 群を抜く力」といった具合です。

その手法を知るために「第七章 酒」に触れてみます。

柳田によると、飲酒は神事として出発します。神前の直会（なほらい）として酒宴を開きました。「満座の顔が揃って、一方の大きな光に向く」ものでした。人心の一致を見るために大盃で飲み、回しました。巡盃が終わると本式の酒盛りとなり、酒の

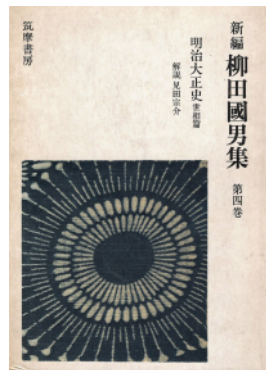
上でのいろいろなしきたりが発生します。順流し、お通し、登り盃、せり盃……。飲み干すのをアラタメル

ですから、酒は女による「社交の調整」でもありました。ところが、社交の場として「客殿」が作られ、床柱の席が男のものになってから、主婦の地位は退歩します。決定的だったのは、自給自足だった酒が、大瓶から大樽へと技術進化

### また読んでみたい本<sup>③〇</sup>

#### 青年たちに

音谷 健郎



古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思います。毎月1冊ずつ紹介しています。

【筑摩書房版の函】

第30回は、柳田国男の『明治大正史世相篇』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

の片割れをもって今日の新文化に入ってきている」と分析しています。古風な威風というものは、固めの盃（婚礼）、別れの盃（盃を割る）、献杯、返杯、お屠蘇（とそ）などです。

柳田の手法は、出来るだけ多くの材料を集め、解析するというシンプルなもの。そこから、形式にとられない幅広い発見があります。

「第八章 恋愛技術の消長」では、様々な婚姻の形態を紹介し、婚姻様式が「整理され過ぎ」たので「種々雑多な内縁というものが現れ」、その方法は年とともに、浅墓（あさはか）なものとならなければならぬのであったろう」と看破しています。

「第十三章 伴を慕う心」では、農業の組合や労働組合、無尽講など諸々の団体に目配りして、「多くの無意味なる団結を抑制して、個人を一たんは自由なものにすること、それが有用な組合を成り立たせる手段」だとしています。「単なる団結心だけならば、我々は決してそれを得手なる国民ではなかった」とも言っています。

賢人柳田の見識自体が、昭和初期の「世相」として興味深く読めます。今回は、宮本常一『忘れられた日本人』を取り上げます。

といい、「めいめい盃」はだらしないものと見られました。

もとは、酒は女が醸し、女が管理しました。だから、お酌は家の主婦の義務というより特権でした。酒は家刀自（いえとじい主婦）が作ることから、「杜氏」の語源となりました。

し、全国商品として流通するようになってからです。酒から神聖さはなくなりまし

居酒屋、出会い茶屋や酌婦の登場。酒の個別化が進み、男だけの社交の具になったと見られます。だから柳田は、酒は「古風な感覚

# 虫と草木と人びとと⑱ 中村慎吾 「風土記時代の中国山地の植物・その一」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

「風土記」とはある地域の地理・物産・風俗などを誌したものを言うが、ここで言う風土記は和銅六年(七一四年)勅命で編纂された地方誌を指す。これは日本最古の地方誌で、当時、全国から徴されたがそのほとんどが失われてしまい、僅かに『出雲風土記』がほぼ完全な形で伝わっている



イメージイラスト(上田としのぶ作画)

以外『常陸風土記』、『播磨風土記』、『豊後風土記』が不完全な形で伝わっているに過ぎない。しかし、八世紀初頭の日本を知る上でそれらの風土記がきわめて価値の高い史料であることには変わりがない。中国山地にかかわりが深い備後国風土記は完全に失われわずかな逸文が伝わっている

の堺なる遊記山に通るは 卅里なり常に剗あり」が、また、仁多郡の記事に「備後の国恵宗の郡の堺なる遊記山に通るは 卅里なり 常に剗あり」とあるように、陰陽を結ぶ道も通じており、そこには常時刻を設けて出雲国の国防に当たっていたところから見て、陰陽の人の往来がかなりあったようすがうかがわれる。常時刻を設けず「但(ただ)、政(まつりごと)ある時に當りて 權に置いた陰陽を結ぶ道もいくつかあり、中国山地の奥深くまで人びとが入っていたようである。加藤義成さん(郷土史家、出雲風土記研究の第一人者)は荒鹿坂を島根県頓原町から大万木山の西側の鞍部を越え広島県高野町へ通じる道の途中、草峠(くさんだお)と推定され、三坂は現在国道五十四号線が走る県境の赤名峠と考えておられる。荒鹿坂のあったルートは頓原と高野を結ぶ道としてその後

中国山地にいつ頃人びとが住みつき開墾に手を染めたか明らかではないが、遺跡から見て縄文時代に遡ることが出来る。そして弥生時代には農耕が始まり、古墳時代も終った八世紀ともなると中国山地の奥深くまで開発が進んでいたとは容易に推測される。出雲風土記はその推測を裏づけてくれている。例えば陰陽の交流も盛んだったようで、飯石郡の記事に「三次の郡(こおり)の堺(さかい)なる三坂(みさか)に通るは八十里なり。徑(みち)常に剗(せき)あり」や「備後(きびのみちしり)の国恵宗(えそ)の郡の堺なる荒鹿(あらか)の坂を通るは 三九里二百歩(あし)なり 常に剗あり」が、また、「備後の国恵宗の郡

の堺なる遊記山に通るは 卅里なり常に剗あり」が、また、仁多郡の記事に「備後の国恵宗の郡の堺なる遊記山に通るは 卅里なり 常に剗あり」とあるように、陰陽を結ぶ道も通じており、そこには常時刻を設けて出雲国の国防に当たっていたところから見て、陰陽の人の往来がかなりあったようすがうかがわれる。常時刻を設けず「但(ただ)、政(まつりごと)ある時に當りて 權に置いた陰陽を結ぶ道もいくつかあり、中国山地の奥深くまで人びとが入っていたようである。加藤義成さん(郷土史家、出雲風土記研究の第一人者)は荒鹿坂を島根県頓原町から大万木山の西側の鞍部を越え広島県高野町へ通じる道の途中、草峠(くさんだお)と推定され、三坂は現在国道五十四号線が走る県境の赤名峠と考えておられる。荒鹿坂のあったルートは頓原と高野を結ぶ道としてその後

も長く利用されており、最近では林道として整備され車での往来が可能となった。遊記山へ通る道は「馬木川沿いに南下して烏帽子山（遊記山）の東を越え、広島県（備後）比婆郡西城町（現・庄原市西城町）油木へ出る路であろう」と解説されている。

また、加藤義成さんは「遊託山（ゆたやま）郡家（こおりのみやけ）の正南三十七里なり 塩味葛（えびかずら）多し」の解説で『遊託山は風土記抄に「阿位郷大馬木の山名なり 是より備後国乙原村隣り。此の山、俗呼んで仙山と曰う」とあって、今、馬木の県境にある烏帽子山（標高一、二二五米）であろう。路程は一九・七七八軒（キロメートル）にあたる』とあり、遊記山＝遊託山は烏帽子山（通称出雲烏帽子）と一致している。ところで、「烏帽子山の東を越え」ということであるが、烏帽子山の東には毛無山があり、毛無山と烏帽子山との鞍部を越えたことになる。

つまり、馬木川の源流を遡り、その東側の支流を登って烏帽子山と毛無山の鞍部に達し、そこから六ノ原へ下り、油木へ出るルートを「日本古典文学大系2 風土記」（岩波書店版）では推定している。しかし、

馬木川を遡って源流域近くの烏帽子山と毛無山との鞍部へ向う支流はきわめて急峻で、しかも、短く、出雲国との国境となる鞍部へ剋を設け、このルートを備後国との街道としたとは考えにくい。むしろ、馬木川の源流をそのまま遡ると、吾妻山と烏帽子山との鞍部、大膳原（だいぜんばら）に達する。そして、大膳原を下ると比和町越原へ通じ、この道は古くから島根県横田町から広島県比和町、西城町を結ぶ交通路として利用されていた。加藤義成さんが引用された風土記抄の「是より備後国乙原村隣り」をあてはめると、大膳原は出雲国と備後国との堺となり、ここに剋が置かれたとしてもふしぎではない。今も大膳原へ島根県側から登りつめたところが県境となっており、そこから南へ越原への自然歩道が設けられている。そして、県境に沿って烏帽子山の山頂へ向けて登山道が設けられている。「烏帽子山の東を越え」ということにこだわると、馬木川源流の一支流を遡り、烏帽子山と毛無山との鞍部の「出雲峠（いずもだお）」に剋が設けられていたと考えられるが、これは無理がある。

## 老いの雑記帳⑦

### 「精神を自由に」

小沢昭一と金子兜太の対談の中で、金子兜太が次のようなことを言っている。

「精神を自由に遊ばせる方法を掴めば、本当に若返る。これも、ひとつの大事な健康法です。でも、心棒がないのはまずい。人間は意志の強さ、『これは絶対譲らない』というものがないと、本当の自由にはなれないですね。ちようど、石臼を回す時の、あの真ん中の木の部分のようなね。」と。

要するに自己防衛のために硬

い理論ばかりを振りかざしている学者のような人には精神の自由は無いということらしい。車のハンドルにも「あそび」があるように、人にも遊び心が無いと心の余裕がなくなり、ギンギンしたまま一生を終ることになる。そんな人は早死にすると金子兜太は言っている。九十歳を超えた俳人金子兜太の言葉は痛快であり、また重みがある。また「胆大小心」（肝っ玉が大きくて心遣いが細かい）という言葉を用いし、男はそうでなければいけないとも言っている。

振り返って自分自身のことを考えてみると、彼の生活信条を尊敬こそするが、わたしとしては願望でしかない。「よく学び、よく遊ぶ」は父のモットーだったが、私の場合は「よく遊び、学校は二の次」だったし、その遊びも、精神の自由を獲得するためなんて気取ったものでは決してなかったから。

※写真はイメージです



「続・思いのままに」我が心の雑記帳」（鈴木澄夫著）より

「BEAUTY of the WORLD」と印字された表紙をめくると、「幻想のシルクロード」というタイトルが現れた。

スタートはトルコだ。真っ白な雪に覆われたタウロス山脈を背景に、蒸気機関車が黒煙をたなびかせて草原を走っている。次のページは、カッパドキア地方のギョレメの奇観。大地からタケノコのように突き出た岩塊群は内部がくり抜かれて、イスラムの脅威から隠れひそんだキリスト教徒の窟院跡だと言われている。「こんなところに隠れていそうだね。ガンちゃん、狭い場所が好きだったもの」

ユリネーがそう言ってわたしの顔を見上げた。かくれんぼの記憶でも思いだしているのだろう。ガンちゃんは岩崎保（たもつ）、今では自分も岩崎姓なのに、いまだにガンちゃんと呼んでいる。

わたしとユリネー、ガンちゃんは幼馴染みだ。当時、テレビで放映されていた「ウルトラQ」に感化されて、「ウルトラS探検隊」を結成した。Sは庄原のイニシャルだ。隊長を決めるのに、ひと悶着あった。

「うちがいちばん歳が上なんじゃ

けー」

ユリネーは一学年上だった。

「女が隊長なんて、聞いたことねえぞ」ガンちゃんが反発した。わたしは最初からスペシャル隊員。ジャンケンでユリネーが勝って隊長、ガンちゃんはリーダーということで落ち着いた。ガンちゃんはここぞというときのジャンケンは力んで必ずグーを出す。

ロウソクの灯火の回りに集まって、

ラジオの歌謡曲を聞きながら、駄菓子をぼりぼり齧りながら、探検隊の今後の計画を飽きもせず延々と話し込んでいた。どうしてあんなに楽しかったのだろう。

その秘密基地は、灯火がお寺の人に見つかって、こっぴどく叱られて撤退した。いま思い返すと、火事騒ぎを起こさなくて幸いだった。

## 「ウルトラS探検隊」 亜木冬彦

あきふゆひこ

### 現代御伽草子 ②⑧

※県北の歴史や風物を題材としたファンタジー小説です。

お気に入りの探検場所は廃屋だった。無断で押し入るのだから、不法侵入の犯罪だ。そのときは、宇宙人のスパイが潜んでいるかもしれないと、本気で考えていた。

探検隊の秘密基地もあった。近所にある金福寺というお寺の軒下で、情報収集のための通信機器と照明器具——、実際には小さなトランジスタラジオとロウソクを持ち込んだ。

「ガンちゃん、また世界を放浪しとるんかな」ユリネーが、寂しそうな顔で言った。ガンちゃんは二十代の頃、バックパッカーとして世界各地を旅したことがある。

「ふかしたジャガイモに、おかずはジャガイモの皮をカレー粉で炒めたもの。便所の下は豚小屋になっとなつて、わしのクソをもりもり喰つとるんじゃ」

東南アジアの寒村を旅したときの話をしてくれた。どんなものを食べても大丈夫な強靱な胃袋が自慢だった。

「じゃけん、必ず火を通したものが食ったらいいけん。水はいったん沸かしてから飲むんじゃ」

日焼けした顔に笑顔が似合った。子供の頃に、よくたむろしていた店があった。お好み焼き屋の看板を出していたが、店頭では駄菓子を売っていた。そして、周囲の棚には漫画本が並んでいて、貸本もやっていた。婆ちゃんが目の前の鉄板で焼いてくれたお好み焼きを、金属のヘラで切り分けて食べながら、貸本の漫画を読むのが至福の時間だった。お好み焼きの客は、タダで漫画が読めるのだ。

古本屋を始めるときに、貸本屋もやれないかと考えた。しかし、それには帳面付けなどの手間がかかる。貸した本が戻ってこないときの対応も面倒そうだ。貸本屋システムというものをひねり出した。うちで買った本を持参すれば、その代金の半額を、新たに買った本から値引きする。買いたい本がないときは、店が出している商品券を渡す。



これなら帳面に記録する必要はないし、気に入った本はそのまま手元に置いておけばいい。汚してしまつた本は、引き取るときに値引きする。ガンちゃんは、この貸本屋システムの熱心な利用者だった。

「ガンちゃんが読んでいた本を見せてくれないかな」

ユリネーがどら書房に通ってくるようになったのは半年ほど前からだ。ガンちゃんが読んだ本を調べたら、姿を消した理由がわかるかもしれない、泣き出しそうな顔で訴えた。「山谷崖つぷち日記」を読んだとき

は、山谷まで行ってみると言い張って周囲を困らせた。山谷の労務者が書いた作品で、作者とガンちゃんはまったく性格が違っているのだが、どこかに共通点を見つけたらしい。

夫婦だけに見せる顔があるのだろう。そのときは、わたしが代りに調べてくるからと言いつつ、ユリネーが用意したガンちゃんの顔写真を預かった。

ウルトラS探検隊は、ユリネーが中学生になったことで自然消滅した。さすがに宇宙人も怪獣も存在しないとということに気づく年齢になっていた。

秘密基地があった金福寺に、ガンちゃんに呼び出された。

「ユリネーのことが好きか？」  
唐突に訊かれた。動揺して、言葉に詰まった。

「やっぱ、そうじゃろうの。わたしも大好きじゃ。けんど、おめえとはずっと友達でおいてえからのう」

恨みっこなしの相撲で決着をつけようと言う。金福寺の相撲大会で、ガンちゃんにぶん投げられたことがある。

「いや、ジャンケンでやろう」

わたしが珍しく頑強に言い張つたので、最後はガンちゃんも折れて

渋々同意した。

「ジャンケン……」

ガンちゃんは必死の形相で、全身全霊の力を込めた拳を突き出した。わたしは茫然と、自分の二本の指を見つめていた。どうしてチョコキを出したのだろう。ガンちゃんが歓喜の雄たけびを上げた。

ユリネーの娘夫妻から、認知症の症状が出ていると相談されたときは驚いた。一年以上も前に交通事故死した夫が、今でも生きていると信じているのだという。無理やり死んだことを納得させようとすると、混乱して症状が悪化する。医師のアドバイスもあって、話を合わせるようにしている……。

「ガンちゃん、今頃はラクダに乗って、砂漠を横断しているかもしれないよ」

本の中ではベドウィンの隊商が、砂漠の中を旅している。ユリネーが隊長のときの少女の顔で笑った。神様のギフトなのかもしれない。彼女の心の中のガンちゃんは、今でも日に焼けた顔で笑っている――。

《参考文献》

「すばらしい世界11 幻想のシルクロード」(国際情報社)

## まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
  - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL：090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から)※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >

特

別

寄

稿

# 『山海経』の菊

高柴順紀

古来からよく引用されてきた菊に関する文献の一つに『山海経』がある。『山海経』は3世紀に中国で著されたものだが、日本へは奈良朝以前に渡来されたとされており、人々に中国古代の地理書として愛読されてきたようだが、菊農家としては菊がどのように記述してあるのか気にな

って仕方がなかった。

そこで菊を求めて『山海経』を探索するが、次々と出てくるのは異形の生きものなどで菊はなかなか出てこないのである。探しているうちにふとあの鼻行類のことを連想してしまった。新発見された哺乳類というふれこみの学術書『鼻行類』が出版



されたのは1961年だった。

「鼻行類 (Rhinoegradentia) は哺乳類の中で独特な位置を占めている。それは、この極度に奇妙な構造を持つ動物がごく最近になってやっと発見されたことから、まずは説明がつく・・・」で始まるこの出版物は鼻で歩く哺乳類の構造と生活が詳しく記述してある。舞台となった島からはそう遠くないオーストラリア大陸で有袋類が存在しているから真面目な学術書と信じ、思わず引き込まれてしまう内容なのだ。結末が研究者も鼻行類も悲劇的な最後をむかえる内容となっていることにも考えさせられてしまう。

ところで菊は中山の九の巻に「岷(みん)山の首(はじめ)は女几(じょき)の山という。山には石涅(せきでつ)が多く、木には柎(もちのき)・櫃(かしのき)が多く、草には菊・おけら(草冠に朮)が多い。」とあった。『山海経』の膨大な活字の中にたった一文字だけの菊が出ているに過ぎなかった。この一文字でもって「菊は『山海経』にあり」では、納得がいかないのである。

《参考文献》  
『山海経』中国古代の神話世界(高馬三良訳平凡社)  
『鼻行類』新しく発見された哺乳類の構造と生活(ハラルト・シユテユン・プケ著日高敏隆・羽田節子訳平凡社)  
※文中のイラストも参考文献から転載させていただきました。

## 「心の底にずんと落ちる言葉」

上田幸子

『おらおらでひとりいぐも』(若竹千佐子著 河出書房新社)

六十三歳の女性が書いた——と話

題になった芥川賞受賞作品。題名からも察せられるように、東北弁と標

準語の入り混じった文体なので、初めのうちはちよつと戸惑いますが、読み進めていくうちに引き込まれてしまいます。

最愛の夫の死によってひとりになった桃子さんは考えます・・・

どうすつぺえ この先ひとりで、  
如何にすべがあ

だいじょうぶだ、おめには、おら  
がついでつから。おめとおらは最  
後まで一緒だから

あいやあ、そういうおめは誰なの  
よ  
決まってつぺだら。おらだは、お  
めだ。おめだばおらだ

悲しくて可笑しくて、それでも桃  
子さんは自分の吐息と足で一步一歩  
生きていきます。そして自分とは何  
かをつきつめていくのです。読み進  
めていくうちに、著者の若竹さんと  
桃子さん、読者の私が三つ編みのよ  
うに一体になったり、またほぐれた  
りー、それは桃子さんが今の平均  
的な主婦だからなのでしょう。誰が  
読んでも心の底にずんと落ちる言葉  
がどこかに潜んでいます。

(上田さんが不定期で発信している  
「熟読遅読速読再読」からの転載

です)

## 「夜ぼり」父との思い出

鈴木澄夫

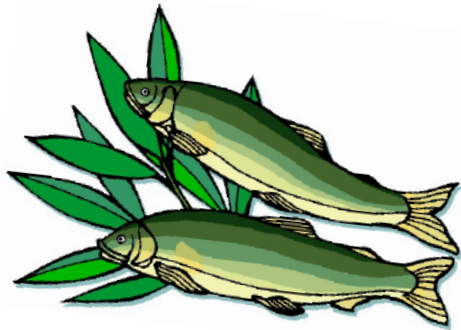
六月一日は昔から太田川の鮎の解  
禁日である。一か月位前から投網の  
補修をし、渋(柿しぶ)をかけてそ  
の日待つのである。父も鮎とりが

好きで、昼間の仕事が終わってから、  
せつせと投網の補修をしていた。と  
ても器用で、子供の私には、手品師  
のように見えた。解禁の日には午前  
四時頃起きて川に行き、五時の解禁  
の合図のサイレンを待つのである。  
解禁の日は網を打つ人がいっぱい  
で、太田川は大いに賑わった。

鮎捕りの思い出といえればカーバイ  
トのカンテラを下げて「夜ぼり」(夜  
魚を捕ること)に出掛けた時のこと  
の方が多い。カンテラの構造は単純  
なもので、カーバイトの塊を入れて、  
それに水を注ぎ、蓋をするのである。  
その蓋の部分に細い管が向き合うよ  
うに突き出し、それぞれ二つに分か  
れた四つの穴からカーバイトのガス  
がぶつかり合うように出てくるので  
ある。それに点火すると、明るい炎  
が幻想的に輝き、反射板の助けを借

りて、広い範囲を明るく照らすので  
ある。

カンテラは私が持ち、兄や弟は父  
の打つ投網の回りに急ぎ、網にか  
かった鮎を手で捕らえるのである。  
投網を打つ瞬間は、カンテラを反転  
させ、川面を暗くするのである。鮎  
が逃げない為だそう。父や兄が、  
網にかかった鮎を手探りで確認する  
と、大声で私を呼ぶのだ。銀色の鮎  
が青白い炎のあかりの下で躍動して  
いる。多い時は一晩で百匹位捕れた。  
家に帰ってすぐにはらわたを出し、  
串に刺して火鉢の中に遠火にして差



### どら書房 喫茶コーナー

モカ、コロンビア、イタリアン等々、  
本格コーヒーやっています。



試飲券50円  
(通常150円)

※切り取らずにお持ち下さい。

し込み、その回りを新聞紙で囲うの  
だ。一晩位で、干物になるのだ。保  
存がきくので、好きな時にそれを甘  
露煮にして食べたものだ。食べるの  
も好きだったが、「夜ぼり」に行く  
ことの方が、もっと好きだった。  
六月、七月は毎夜のように父に「夜  
ぼりに行くか」とねだったものだ。  
昼間の疲れで、なかなか父も同意し  
なかったが、それでも一週間に一回  
は連れて行ってくれた。常には怖い  
父だったが、「夜ぼり」の時はいつも、  
ニコニコしていたような気がする。  
「お父さん」っていう感じだった。  
肌と肌との触れ合いのような親子関  
係が成立するひとときであったよう  
な気もするのである。  
(「続・小さな鼓動」からの転載です)

# 今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

## 「桃仙人」

嵐山光三郎 著 ちくま文庫

「小説 深沢七郎」の副題。深沢のデビュー作である「樫山節考」は、民間の姥捨て伝説を描いたもので、二度映画化されている。小説以上に話題になったのは、破天荒な私生活。「風流夢譚」で皇室を侮辱しているような内容の描写があったために右翼から狙われ放浪生活。生涯独身で、山梨の「ラブミー牧場」で農耕生活を送りながら、浅草の近くで今川焼屋を開いたこともある。



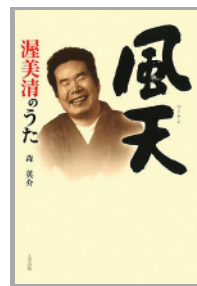
著者は編集者としてオヤカタ（深沢）の農場に24歳のときから出入りして、20年近くの歳月が経過して「斬り捨てられる」までの日々を描いている。才人の愛情は濃厚で理不尽、だから魅了されるのだろう。赤瀬川原平との対談も収録。

## 「風天」

森英介 著 大空出版

「渥美清のうた」の副題。風天は「男はつらいよ」のフーテンの寅さん、渥美清の俳号。本人に俳人を気取るつもりはさらさらなく、趣味で句会を楽しんでいただけなのだが、こうして本で紹介されると「ヤボなことをすんなよ」とぼやく寅さんの声が聞こえてくるようだ。

「お通路が一行に行く虹の中」「赤とんぼじつとしたまま明日どうする」「どぶろくやはらかに噛んで眠くなってくる」「蛍消え髪を匂いのなかに居る」。



情景がしみじみと浮かんでくる。「切干とあぶらげ煮て母丈夫」、風天俳句の発掘は、本名の田所康雄の素顔に迫る旅でもある。

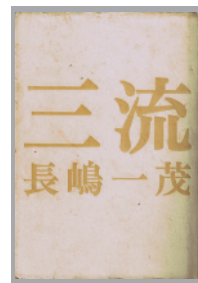
今年一番の収穫。古本屋をやっている良かった！

## 「三流」

長嶋一茂 著 幻冬社

タレント本の類だろうと思って気軽に読み始めたが、次第に引き込まれた。一流になれなかった元プロ野球選手の回顧録が、こうして出版されることは難しい。頂点に立った選手だけに許される特権。夢を諦めなければ必ず成功する、そうした成功譚の裏には、途中で挫折した者たちの累々たる屍がある。

どうしてこんな三流選手の本が出たか、長嶋茂雄の息子だからである。偉大な父親と比べられることを承知で真つ勝負、蝶で固めた翼で太陽まで飛ぼうとした野球界のイカロスは、ズタボロになって墜落する。一茂はゴーストライターの存在を明らかにしている。石川拓治、一流の仕事人である。



## どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

## どろろくろ俳壇

野分去る大きな虹の置き土産

近藤 昌平

八十路にも熱き血潮や緋のカンナ

竹地 恵美

ふくやかに作りて涼し鳩の笛

原 博己

炎天下けわしき顔で戻りけり

片岡 正人

緑陰で朝耕休みの読書かな

隆 愚

遺伝子のどんづまり俺墓洗う

赤川 冬人

## 投稿&寄稿

### 「負動産」

M・A

最近、負動産という言葉をよく目にする。不動産ではなく、負動産。バブルが弾けて土地神話が崩壊、少子高齢化で空き家問題が深刻化する中で生まれた言葉だ。

処分したくても処分できない不動産。自分が購入したものならば、ある程度の自己責任はあるのだから、親から遺産として相続した場合、運が悪くといふか言いようがない。できれば相続したくないのだが、遺産放棄での取捨選択は許されていないので、他の遺産もすべて放棄することになってしまう。

※投句を歓迎します。

いったん相続してしまうと、日本では土地を「捨てる」制度は存在しない。管理コストや固定資産税を延々と払い続けることになる。海外ではどうかというと、ドイツでは土地を放棄する法律が整備されているらしい。しかるべき手続きをして放棄された土地は州に帰属して、公的な専門組織が管理する。そこで有効利用、あるいは販売できれば土地も生き返るが、使い途のないものは「無主地」として放置される。しかし、管理費用は行政の負担なので、地域によってはそのコストが増大して問題になっているという。

私も負動産を相続している。東広島市にある土地で、不動産屋に売却を依頼しても相手にされない。山を切り崩して造成した土地なので、道路から切り立った崖をコンクリートブロックで固めている。その側壁のひび割れを修繕するだけで三十万円かかった。今後、自然災害等で大規模な修繕が必要となったら……。

今や負動産は、お金を払って処分してもらおう時代になっている。「タダでお譲りします」の物件は数多く、中には家具等の処分費として「50万円お付けします」というような条件もあるらしい。「謝礼を支払ってと

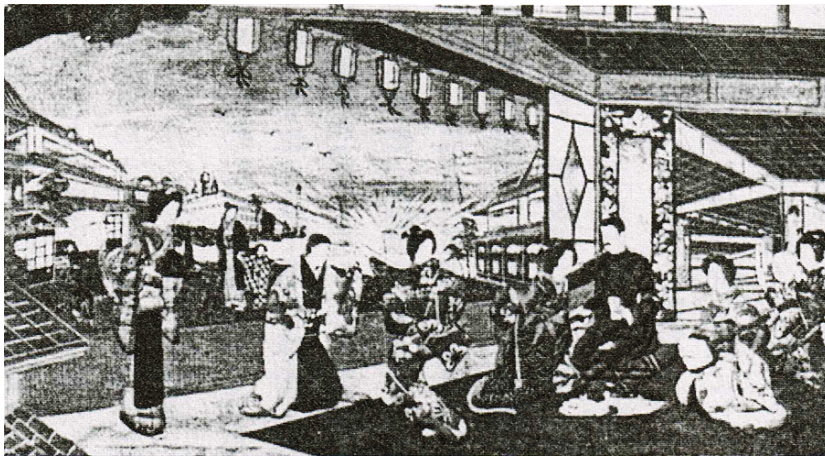
ある法人に所有権を移転、その法人の所有者は高齢で闘病中、寿命が尽きれば相続人はひとりもない……」、真偽は不明だが、そんなダイクな体験談も紹介されていた。少子高齢化で空き家に悩んでいる国がある。同じ地球上で、どこにも行く場所がなくて、劣悪な環境で暮らしている難民がたくさんいる。この二つの問題をうまくカップリングして解決できないものか……、そんなことを考えてしまった。暴論ですか？



県北名作館①（※過去に発表された作品を紹介）

# 「のぞき」の話 第3回

あきら  
米花 斌



のぞき絵「幽霊の継子いじめ」

オールドフアンのために「不如帰ほととぎす」の歌詞を紹介しよう。

アラー 三府一の東京で、波に漂うますらおが、はかなき恋にさまよいて、父は陸軍中尉にて、片岡子爵の長女にて、桜の花の開きかけ、人もうらやむ器りようよし、その名は片岡浪子嬢

ヤレー 海軍少尉男爵の、川島武男の妻となり、新婚旅行をすまされて、伊香保の山のわらび狩り、遊び疲れてもるとともに、その夜わが家に戻られる

ヤレー 武男は軍籍ある故に、やがて行くべき時は来て、逗子の浜辺の海岸で、武男がボートに移る時、浪子は白いハンカチを、打ち振りながらネエあなた、早く帰ってちょうだいね

ヤレー 一度帰りしその時は、浪さんわが家の人ならず、二度目に帰りしその時は、浪さんこの世の人ならず、八千やくいのホトトギス、泣いて血を吐くホトトギス

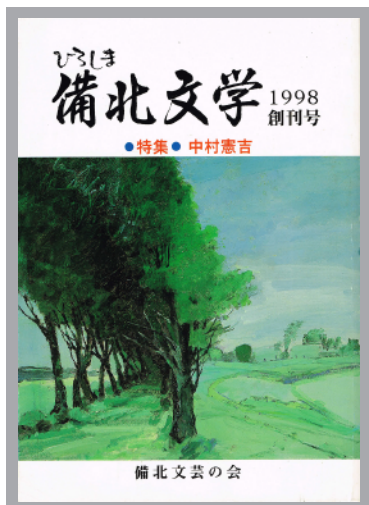
一編の出し物は語りにも十分くらいかかった。たて混んでくるともうけとばかりに、五分くらいに縮めて客の入れ替えを早くした。反対に客が少ないときは、即興の文句で引き延ばした。出し物は同じ日、同じ場所では、同じものが繰り返して上演された。見料は明治末年が子ども一銭、おとな三銭。大正の末になると子ども二銭、おとな五銭。昭和三年ころは五銭と十銭だった。地元世話人

たちの話である。

「のぞき」は各地の縁日や夏、秋の祭りなどで開帳された。よく知られたにひつめ爾比都売神社の裸祭りは旧暦一月二十日で、この日は近県から若者たちが押しかけた。「のぞき」も前日からやって来て昼夜演じられた。「のぞき」がかかったのは、神社を中心に百メートルも露天が並ぶ街頭だった。「福木（裸祭り）で若者たちが争奪する宝木」の晩にや、早う道具をとらぎようたよの。押しこうが危なえけえのう。」夜は早めに限り上げたようである。

（次号に続く）

◆「ひろしま備北文学」創刊号（一九九八年七月発行）からの転載です。◆



# どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など  
情報掲示板です。

## ● 一 硬式テニス参加者募集 ●

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

・火曜日 (9:30 ~ 12:00)

・水曜日 (9:30 ~ 12:00)

・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



## 「ほほ庄原産おばん菜プロジェクト」

庄原の「米」を含めた庄原産の食材を7種類又は70%以上  
使用したメニューを開発し、庄原のおいしさを再発見して  
もらおうというプロジェクトです。認定店15店舗の紹介マップ  
のパンフレットを配布中。

お問合せ：庄原商工会議所 (TEL0824-72-2121)

<https://shobara-info.com/topics/1500>

### 《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
- 教室&講座案内
- イベント情報
- あなたの大切な本の紹介
- ボランティア・ライター(現地記者)募集!

※応募先はどら書房・赤川まで。  
掲載は無料です。

### どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して  
いるので、ダウンロードして  
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

## 「仲間になってください」

障害者や高齢者の施設に出向いているんな行事のお手伝いをしたり、災害被災者の救援  
活動をしています。「出来る時に、出来る事を」をモットーに、活動を楽しんでいます。

福祉ボランティアグループ・庄原市まちづくりを進める市民活動登録団体  
ほほえみの会

連絡先：寺岡隆行 (TEL&FAX 0824-72-2793 携帯 090-7540-9029)

## 編集後記

◇今回はいつもよりも  
2ページ多い特大号。  
ベースは12ページなの  
ですが、寄稿が多かつ  
た月は臨機応変に対応  
させていただきます。  
なお、読者の要望で、  
先月号からページ番号

を入れていきます。

◇8月25日に「庄原よいとこ  
祭り」が開催されました。ど  
ら書房でも軒先に提灯を掲  
げ、店頭に机や椅子を用意し  
てパレードを観覧。ワインや  
ビール、簡単なツマミを用意  
古本屋も祭りが終る九時過ぎ  
まで営業しています。毎年の  
恒例で、来年は遊びに来て下  
さい。  
◇よいとこ祭りや花火大会が  
終わると、夏が終わった感が  
ありますが、今年の残暑はま  
だまだ続きそうです。お身体  
ご自愛ください。

発行：どら書房  
〒727-0012  
庄原市中本町 2-1-10  
☎090(9913)3052(赤川)  
e-mail: touzin@sannet.ne.jp  
年間購読料：2,000円(郵送料込)

誌面デザイン：ROUTE183  
協賛：九日市愛好会

# 第 212 回 ひょうばらくんちいち 「庄原九日市」

平成30年

9月9日 (日) 9:00~13:00

## 「手帳」 庄原九日市とは?

天正年間(440年前)に物々交換で始まった市(いち)。  
昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

## 「手帳」 TOPICS

### ★市民ギャラリー「アート多愛夢」

→お茶席(庄原茶道連盟)

とき: 9月9日(日) 9時30分~16時

### ★どら書房

→九日市の日には営業します。

月曜日と火曜日はお休み。

### ★風龍

→九日市スペシャル! 餃子200円!

### ★楽笑座で「うた声喫茶」開催中。

## 「手帳」 出店配置図



① お休み

② タラワーフード

③ 昭助  
とらち  
二八そば加工所  
アーミッシュ  
さだっさ  
佐藤食販  
健康企画グループ

④ 郷屋  
ぬくもり

⑤ ちくちくはうす玉手箱

工房アム  
かぐや姫

⑥ Room of Keiko  
めだかの学校  
やまのおみやげや

⑦ 農 楽 会

⑧ さとちゃんち  
アパレルゴトウ

⑨ お休み

⑩ お休み

⑪ お休み

⑫ お休み

⑬ 山本水産  
くんえん工房 香豚  
ハナビラタケ広島

⑭ まなべ商事

⑮ 田崎屋  
砂田海産  
佐藤園芸  
珈琲屋スプレモ  
宮川屋  
ネコのあし音

⑯ お福  
開盛社

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円~ 九日市愛好会事務局  
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ  
<http://www.kunchi-ichi.jp>

